

## 10.9 下斗米フォーラム事後報告 11月22日

2021年10月9日 世界資本主義フォーラム

下斗米伸夫

ソ連崩壊30年—ロシア政治史1988-2001年

—プーチン・ロシアの世界戦略を知るために

### 10.9 下斗米フォーラム事後報告 目次

■フォーラムの経過/1

■司会者（矢沢）の感想/1

■質疑から/5

■参加者アンケート回答から/10

●テーマ 「ソ連崩壊30年—ロシア政治史1988-2001年

—プーチン・ロシアの世界戦略を知るために」

●講師 下斗米伸夫(法政大学名誉教授、神奈川大学特別招聘教授)

●期日 2021年10月9日(土)13時30分～16時30分

●方式 ZOOMによるオンライン形式で開催

●主旨 ペレストロイカからプーチン政権までを史料や回想に基づき再構成、再解釈した。

帝政ロシア以前のロシア正教異端派(古儀式派)という「二つの帝国」が抑圧した隠れた存在が、20世紀ロシアをいかに変えたか。ソ連邦—ロシアの関係が、共産党の指導的役割放棄とともに、いかに変わったか。85年4月総会の秘密。8月クーデターとはゴルバチョフの連邦制危機へのプランBであった。ウラル古儀式派としてのエリツィンと主権ロシア、93年エリツィン体制危機、96年大統領選挙以降のオリガルフ(寡頭支配の鉄則?)、プリマコフの挑戦とプーチン体制の成立。

●参考文献

下斗米伸夫著『新危機の20年—プーチン政治史』(朝日選書2020.10)

同 『ソ連を崩壊させた男、エリツィン』(作品社、12月刊予定)

### ■フォーラムの経過

講演は前半と後半に分けてもらった。スライド(資料2)に沿って、講演。

前半は、「ソ連崩壊30年をまとめる、新しい史料とロシア論、古儀式派(ラスコリニキ)という視点(配付資料)、エリツィン政権とロシア人」について。

10分休憩をはさんで、前半についての質疑、続いて後半の講演。

後半は、「プーチンの『新危機の20年』の小括、米ロ関係とカトリック—正教関係」について。

最後に、30分余の質疑の時間がとれた。

### ■司会者(矢沢国光)の感想

(1)世界資本主義フォーラムで「ソ連・ロシア」を取り上げたのは、今回が初めてだ。取り上げた理由は、以下のような、世界資本主義の段階認識と、ロシアの地政学的重要性からだ。

(2) 第二次大戦後の「米ソ冷戦体制」が終わり、米国一強体制が続いたが、中国の台頭と米国の後退で、「米国一極支配体制」(パクス・アメリカナ)に縦<sup>ほころ</sup>びが目立ち、世界は様<sup>さま</sup>変わりしつつある。世界はどう様<sup>さま</sup>変わりつつあるか？

戦後「冷戦体制」は、欧州における「米欧の NATO・対・ソ連東欧」が東西対立の主軸で、アジアにおける「米日等・対・中ソ」は副軸であった。

「ソ連東欧」が崩れ、同時に「米欧の NATO」にも亀裂が入って、欧州は東西対立が解消し、国際政治の「主軸」ではなくなった。国際政治の主軸は、東西対立の残るアジアに移行した。

改革開放後の中国は、「市場経済」(資本主義的経済運営)の導入と米国のこれに対する協力(関与政策)で、経済力、そして軍事力の急拡大に成功してきた。

これにたいしてアメリカは、「自由貿易」の見直しとクワッド(米日豪印)や AUKUS(豪英米)で巻き返そうとしている。

こうして、世界は、米中の「新冷戦」の様相を帯びてきた。

この中であらためて浮上してきたのが、プーチン・ロシアである。

ロシアは、ユーラシア大陸の東西にまたがる大国であり、冷戦時代は、欧州でもアジアでも、一方の主役であった。

(3) そのロシアが、ソ連崩壊後の破綻国家から、プーチンの指導力により、経済的にも軍事的にも回復した。ロシアは、チェチェンとIS という、内外の過激派テロを軍事制圧し、アメリカの撤退した空白を埋めた。と同時に、ロシアは、「NATO 東方拡大」の焦点となったウクライナでは、クリミア併合によって、西側 G8からの追放・経済制裁という大きな制約を背負い込む。そのけっか、ロシアは、「脱墮入亜」つまり、「アジア国家」をめざすようになった。ロシアの中国・日本・北朝鮮への接近——ロシアの対外戦略は、国際政治の動向を左右する大きな要因になっている。世界資本主義フォーラムがロシアを取り上げた理由だ。

(4) 下斗米氏は、ロシア革命とソ連崩壊を、〈政治過程をその深層で動かした強固な反ロシア帝国の宗教的地下潮流があった〉という視点で見直す——そのキーワードが「古儀式派(ラスコリニキ)」だ。

こうした視点は、ロシアではドストエフスキーの小説などで古くからあり、ソ連でもレーニンの秘書だった異端的ボシシエビキ系研究者による大部の研究書も出ているという(岩田昌征氏との質疑参照)。

ソ連崩壊後、ロシア革命史の見直しが進んでいるが、古儀式派については、正直に言って、知らなかった。下斗米氏が参考文献として挙げた『新危機の 20 年-プーチン政治史』を事前に読んでいたが、それでも、講演を聞いて「よくわかった」とは言えない。参加者の多くも、同様ではなかったか——岩田昌征さんなど、研究者を除いては。

そこでフォーラムの後、下斗米氏の『神と革命』を読んだ。おおよそ「わかる」ようになった。わかるだ

けでなく、ロシア革命史の——さらには「マルクス・レーニン主義」についての——見直しについての、ひじょうに重要な問題提起であると感じた。

自分が、下斗米氏の歴史や政治にかんする講演・著作が「わかりにくい」と感じたのは、なぜだろうか、と反省してみると、一つのことには思い当たった。

「わかりやすい」「よくわかる」というのは、往々にして、すっきりと理論化されており、理論の枠組みを通して現実の複雑な出来事が整理されているからだ。社会科学には、こうした理論化・概念化が欠かせない。

だが同時に、理論化・概念化は、そこに収まりきれない現象を排除し、見落としてしまう原因となる。

下斗米氏は「自分は、政治学者からは歴史家と見られ、歴史家からは政治学者と見られる<sup>ぬえ</sup>的存在」と自己紹介した。

眼前に進行する政治過程や第一次的な歴史資料から本質的と思われる現象を取り上げ、理論化し、理論の枠組みでさらに現象に迫る。枠組みに収まらないが無視できない現象も出てくる。「理論」は絶えず現象によって改訂を迫られる。

下斗米氏は、プーチン・ロシアの政治過程の把握や古儀式派をてことするロシア史の見直しを、いままに進行している政治現象や発掘された史料に即して、政治学歴史学を作ろうとしているのだ。「わかりにくい」のは、形成途上の「理論」——仮説としての理論が現象によって改訂・進化される——であったからだ。

「わかりにくい」ことは、「理論」の欠陥ではなく、政治学・歴史学の研究が本来とるべき姿を、素人の私たちにも隠さず示してくれた結果なのだ。社会科学の第一線の研究者の姿をかいま見せてくれた、貴重な講演だった。

(5)ロシア革命というと「1917年10月革命」という通説に対して、下斗米氏は「ロシア革命は1905年革命、2月革命、10月革命の3つあるが、重要なのは1905年革命と1917年2月革命だ」という。そして、レーニンが、当初、革命政権の基礎とした「ソヴェト」の起源は、1905年のイワノボ・ボズネセンスク[ロシアのマンチェスターと呼ばれた産業都市]の労使関係、ソユーズ(Union)にある、という。ソユーズには、職業ソユーズ(労組)、農業ソユーズ、弁護士ソユーズ、解放ソユーズ等があるが、リベラル・左派の結節点であり、1905年には、日露戦争でのコサック=古儀式派兵士の擁護運動から宗教寛容令とソユーズの運動としてはじまった。それらのソユーズの頂点として1905年にソユーズ・ソユーズフ=最高ソビエトが作られた[スライド9]。

1917年2月革命も古儀式派的資本家=上層部の主導するものであった。

(6)ロシア革命の焦点を10月革命よりも2月革命、2月革命よりも1905年革命へと移すことによって、たしかに、ロシア革命のイメージが変わってくる。これまでのロシア革命像は「帝国主義戦争を内乱へ」の実現であった。1905年革命のもつ意味がはっきりしなかった。古儀式派——ロシア帝国の専制政府とそれと一体化した正教主流派の迫害に対して、宗教的結束を基盤に命

がけの徹底抗戦を続けてきた一大地下人脈——は、土地貴族の支配するロシア帝国の旧来の政治経済から排除されているがゆえに、新興の金融・産業資本に活路を求めて力をつけてきた。1905年革命は、19世紀末以降の列強の対立激化[日露戦争もその一つ]によってロシア帝国がその弱さを露呈し、上からの再編強化を迫られる中で起きた。旧帝政派に対して、古儀式派の資本家・労働者・農民が、最大の対抗勢力として現れた、ということだろうか。より体系的な研究成果を知りたい。

(7)ロシア革命を2月革命、さらには1905年革命を中心にみる視点では、レーニンによる10月革命は、党がソヴェトから権力を奪った革命となる。

[10月革命では、党が「赤軍」を組織して旧帝政派の軍を打破した。これは党なくしてできなかったこととされるが、下斗米氏によれば、かならずしもそうではない。「赤軍」は帝政軍の多くの将兵を引き継いでおり、ここにも古儀式派の流れを見ることができるといふ。10月革命の代表的詩はブロークの「12」であるが、最後は革命戦士がキリスト(Isus—古儀式派表記)の元に行くという趣旨だ。]

下斗米氏は、スライド9で、ソビエトについて

- レーニンは、武装闘争機関としてしか評価せず(1905)、しかし1917年4月『全権力をソビエトに』、パリ・コンミュンとの類比は、後知恵
- 1918年3月 ロシア共産党(ボリシェビキ)形成は、権力掌握のあと
- 1918-21年に党とソビエトの矛盾(穀物調達、労働組合論争、クロンシュタット反乱)と述べている。

農民を敵に回した食糧徴発はロシア革命の失敗を端的に示すものだ。これまでは「社会主義」への必要悪と見なされてきたが、それでよいか?10月革命そのものの是非が問われていると思う。

(8)レーニンとスターリンの「党」は、ソビエト革命を「乗っ取った」が、それで「ソビエト」が消失したわけではない。下斗米氏は、スライド10で

- 古儀式派とは帝国に対抗する影のロシア国民国家と考えるとわかりやすい
  - 歴代首相(ルイコフ、モロトフ、マレンコフ、ブルガーニン)はスターリン以外古儀式派の末裔
  - ソビエト議長、労組関係者(カリーニン、シリャブニコフ)も同様
- と述べる。

「古儀式派系」は、ソビエト体制下でも「古儀式派」を通してつながっていたのだろうか?古儀式派としての理念や精神が受け継がれていたのだろうか?

(9)ソ連の崩壊は、下斗米氏によれば、10月革命による(党のソビエトに対する支配)をひっくりかえしたものだといふ。共産党のソ連を残そうとしたゴルバチョフに対する、共産党の消滅・主権共和国

の連合に舵を切ったエリツインの勝利であった。そのエリツインとは何者か。下斗米氏は、エリツインはウラルの古儀式派だと言う。「帝国に対抗する影のロシア国民国家」が表に現れた。それがソ連崩壊の意味だと言うことになる。

だがじつは、「影のロシア国民国家」は、スターリン体制下のソ連で、すでに表に現れていた。1941年ナチス・ドイツの侵入に対して茫然自失したスターリンに替わって、「聖都モスクワ＝第三のローマ」防衛の対ドイツ戦争を主導したのは、シベリアからの古儀式派兵士だという。そして、「大祖国戦争」以降、祖国防衛のための宗教的意識はスターリンのもとで蘇生され、動員された。

#### ■ 質疑から

#### ● 岩田昌征

非専門家の私＝岩田の印象では、ロシア・ソ連・ロシア近現代政治史を論ずる日本人研究者集団の中で、下斗米氏は、17世紀後半以来の古儀式派の社会的存在の意味を重視強調する点で特異な光彩を放つ。

周知のように、サンクトペテルスブルグに首都を構えたロシア帝国は、18世紀以来、古儀式諸派を弾圧しつつ、外はオスマン帝国を圧迫しつつ、東中欧の強国としてヨーロッパ国際政治に登場した。西欧中欧では主に悪役、嫌われ役であった。マルクス、エンゲルスのロシア嫌いは顕著であった。古儀式派が反キリストとみなした帝国正教会は、そのような国際環境においてロシア帝国の対内的結集性と対外的正統性を保証し、供給し続けてきた。すなわち、帝国正教会内部には国家安全保障と軍事外交に関する本能的感覚が涵養されていた。

それに対して、古儀式派の諸セクトは、国家権力に圧迫される伝統貴族、農民層の一部、新興商工業者による自生的経済社会生活の宗教的・精神的支柱となって、西洋の資本主義的近代化におけるプロテスタントの役割に相似する役割を果たしたと思われる。しかしながら、西洋プロテスタントとは異なって、自己の独立諸国家を帝国に対抗して創設することはなかった。それゆえに、近現代世界を生き抜くに最も必要な技能を体得するチャンスが古儀式派にはもともと欠如していた。国政と軍事外交を一体となして、こなしていく技能の欠如である。

それゆえに、例えば、プロテスタント・プロイセンのビスマルクのような政治家、ハプスブルグ帝国やフランス・ナポレオン3世帝国を手玉に取るような国政家を生み出す社会的土壌は、古儀式派の伝統の中に不在であった。革命家を輩出する土壌になっても。

ここで質問である。

(1) 下斗米氏が主張するように、革命後のソ連政権首脳に古儀式派家系の人物があれば多く存在していたとしたら、その事実が革命国家の国内秩序形成と国際外交に直接的、あるいは間接的にいかなるプラス、マイナスの作用をなしたのであろうか？

古儀式派は、司祭容認派(ポポーフシチナ)と司祭否認派(ベスポポーフシチナ)に大別され、それぞれが数多くの独立諸派に分かれる。対するロシア帝国正教会の方も、帝国内では統一組織体であっても、帝国外の諸国家・諸民族の正教会とは同列の一教会にすぎない。

(2)カトリック教会のように 諸国家・諸民族のカトリック教会を全体の完全な一部となす世界的ヒエラルキーをなしていない。オートセファラス(独立、自立)である。

ここに一つの謎がある。下斗米氏がそう努力しているロシア革命を宗教的伝統の中においてみた時の謎である。社会主義革命がロシアで成功した直後、レーニン等の革命家は、カトリックの普遍教会を模倣したかのごとく、コミンテルンにカトリックと同じ組織原理を採用した。各国共産党は、世界共産党の、例えば日本支部、ブラジル支部として発足した。1943年のコミンテルン解散以後、各国共産党の関係は、諸正教会関係のごとく、オートセファラス(独立、自立)となった。その後、各地域で新左翼諸グループが誕生し、まるで古儀式諸派のごとくである。

なぜ、レーニン等は、ロシアの伝統に反するようなカトリック教会流の世界党を組織したのか。古儀式派系のボリシェヴィキ指導者が多いというのに。

(3)下斗米氏は、ボリシェヴィキと古儀式派の濃い関係を、司祭派(ポポーフシチナ)の富豪サツパ・モロゾフが作家ゴーリキを介してレーニン党に資金提供していた事実によって例証する。

私＝岩田は、この論脈で**ゴーリキ作『どん底』**が古儀式派的ロシア世間のドラマであると解釈する。私見によれば、『どん底』の主要人物は、木賃宿の亭主コストウイリョフ(54歳)と巡礼ルカ(60歳)である。『どん底』の舞台は、木賃宿の地下室であり、そこに何人かの零細職人たちが木賃を払って雑居している。突然、ルカ老人が「旦那衆、ごきげんよう！」と出現する(第一幕)。そして、殺人事件の騒動の中、殺人犯でもないのに突然姿を消す(第3幕)。ルカの影の下で談論する(第4幕)。

私＝岩田の印象によれば、ルカ老人は、古儀式派の中の逃亡派(ベグーンストヴォ)に属する巡礼であろう。

ピョートル大帝が開始した上からの近代化は、古儀式派の民衆にとって反キリストそのものであった。身分証明書所持義務、農奴制強化、兵役義務、人頭税、西欧式工場、西欧的同業組合等の反キリスト世俗世界からの逃亡に救いを求めた。逃亡派は、二つの部分からなる。一つは、実際に実世界から離れて一生を巡礼して過ごす者。もう一つは、逃亡生活に共感しながらも世俗世界から離れられなかった者は、身分証明書・旅券を持たぬ巡礼＝逃亡者(ベグーヌイ)を匿う掟に従う。ジローブイエと呼ばれ、ベグーヌイに隠れ家と生活の糧を提供する巡礼受け入れ者たちである。

ルカ老人は、ベグーヌイ。地下宿の持ち主コストウイリョフは、親の代まではジローブイエであったが、本人は帝国の世俗になじみ、帝国正教会に改宗していた。そして、本来は隠れ家である地下室を木賃宿に転換していた。そんな事情を知らなかったベグーヌイのルカ巡礼が突如木賃宿に飛び込んできた。そこから、ドラマ『どん底』は始まる。これが私の解釈。

ルカ老人が古儀式派であることは、翻訳では直接見えてこないが、ロシア語の原本を見ればすぐわかる。知人のロシア語通訳からソ連時代に出版された『どん底』(Na Dne)で確認すると、ルカ老人の発言「イエス・キリスト様」(岩波文庫、中村白葉訳、81、83、100 ページ)、や「やれやれ…」(103 ページ)は、全て呼格で、Isuse になっている。主格では Isus である。手元の小学館、三省堂のロシア語辞典には Isus はなく、Iisus だけである。Iisus が帝国正教会の、Isus が古儀式派の綴り

ではなかろうか。ただし、セルビア語でもクロアチア語でも、すなわち正教国セルビアでもカトリック国クロアチアでも Isus である。訳者中村白葉は、解説の末尾で「ルカは…登場する十指に余る人物…現実的人物である中であって、一人やや架空の人物めく感銘を与える存在である」と評価する。しかしながら、古儀式派の逃亡派(ベグーンストヴォ)が実在であったことを考えれば、ルカの架空性よりも現実性を見たほうが『どん底』は面白くなる。

下斗米氏に私の『どん底』論を古儀式派研究から評していただきたい。

(4) 下斗米氏は日本における古儀式派研究の蓄積について若干触れておられたが N. M. ニコリスキー著『ロシア教会史』(宮本延治訳、恒文社、1990 年)の意義については全く言及されなかった。私などの古儀式派に関する知識は、ほとんどソ連科学アカデミー 通信会員 ニコリスキーの本書による。本文 500 ページに近いこの訳書に言及しないで、日本における古儀式派研究を云々できるのだろうか。

●寺沢 (米国ワードバーグ大学) 先生の著書 神と革命は以前から愛読しております。

1) 先生の古儀式派の革命の背後のご発見は卓見です。その方法論は丸山真男の古層と通奏低音のモデルから来ておりますか？

2) 古儀式派のソユーズとレーニンの共産党の対立は 哲学的に無神論の唯物弁証法、史的唯物論とマルクスレーニン世界観と古儀式派の宗教的な社会主義。共生主義との対立が原因でしょうか。それがエリツインとソビエトとの対立に反映されていますか。

▲下斗米 古儀式派について「ウクライナと帝国を形成する以前の国家と教会のあり方こそ正しい」とする考えがあるが、これについていちばんくわしいのは、南原繁先生です。南原先生が 1955 年イワノボに行かれて教会を見ている。関東軍の収容所[教会]を訪れている。日露戦争のあとの日本人捕虜収容所もイワノボにあった。1966 年ドストエフスキーによるラスコリニコフが主人公の「罪と罰」が映画化されたとき、南原先生は「無神論国家でなぜ罪と罰が映画化されたのか」と書いた。

古儀式派も多数の派に分かれる。1905 年前後右は「黒 100 人組」、左はボリシェビキのブブノフら。古儀式派的世界は、宗教警察の公式発表では 200 万人ー300 万人とされるが、2000 万人ー3000 万人ともみるレーニンの秘書で古儀式派研究者のウラジーミル・ボンチ=ブルエビッチもいた。人口 1 億のうち 3000 万人が古儀式派であったとすれば、兵士の大半は貧しい古儀式派農民であった。ロシア革命のとき「12」という詩が作られた。「12」は、革命兵士 12 使徒がキリストのもとに馳せ参ずるという意味だ。

●司会 (矢沢) さきほど「10 月革命よりも 2 月革命が重要だ」と言われた。どうしてか、聞きたい。2 月革命は、グチコフら産業資本家が帝政打倒の先頭に立っていたが、これをどうみるか。

▲下斗米 1905 年が第一革命、1917 年 2 月が第二革命、1917 年 10 月が第三革命と言われた。

1905 年は、古儀式派の教会が許され、ドゥーマが開設された。だから 1905 年は革命ではない、と思っていた。ところが、モスクワを歩くと「1905 年革命通り」とか「赤いプレスニア」、とか「バリケード通り」とかある。地名になっているというのは、やはり 1905 年革命が強烈だったからだ。イワノボではソビエトができたが、モスクワでは、街頭でぶつかった。

グチコフら 2 月革命の主要閣僚は古儀式派だ。10 月革命直後の最初のソビエト政府は、閣僚が、ノギン、ルイコフ、フルンゼら穏健ボリシェビキ党员で、みな古儀式派系だ。ブハーリンのように左派もいたが。

古儀式派は、繊維産業・化学産業や銀行も知っており、またアメリカを知っているとかで、使われた。

スターリンに寄り添っていたモロトフもじつは古儀式派で、ゴルバチョフによって復権された。わたしは『ソビエト連邦史 1917-1991』（講談社学術文庫 2017）をモロトフ論を中心に書いた。

▲**下斗米** 古儀式派に教会はない。陰の国民国家の残像みたいなもの。エリツインは、ソ連崩壊後のロシアでここに石油の収益を市場経済で配分したいと考えた。

1905 前後の古儀式派系理論家はポクロフスキーのように一国社会主義論で、その影響が強い。1920 年代初めまでの世界的動乱期に、トロツキーなどユダヤ系革命の影響でコミンテルンができた。世界革命論が優勢だった。ヨーロッパで、20 年代半ばの相対的安定期には、国益重視が台頭し、トロツキーやジノビエフの没落になったと考える。

●**司会（矢沢）** NATOの東方拡大は、ロシアにとって大きな問題。ここからプーチンのクリミア併合が出た。欧米が制裁を課し、未だに解決されない。クリミア併合はまずかったのではないかという意見も出ているという。プーチンはこれに対して、ロシアの「脱欧入亜」つまりアジア重視への転換を進めようとしている、と先生は書いています。「脱欧入亜」がいまどうなっているか、聞きたい。

▲**下斗米** 2014 ソチ・オリンピック前後以降の経過を見ると、ウクライナは、東は正教、西はカトリックと、東西に分裂した脆弱な国家だ。ただ、プリマコフ外相は、ナショナリストとは一線を画して、1997 年、クリミア問題と黒海艦隊の軍港問題を賃貸（2017 までの 20 年契約）で解決した。メドヴェージェフ大統領のとき、ヤヌコービチという東部軍産複合体系の人が 25 年間延長を決めた。ウクライナのティモシェンコ（首相）はリアリストで、モスクワとも話をしたが、NATOの東方拡大が（東欧だけでなく）欧米全体の意向になると、プーチンはアメリカにノーを言う大統領になる。2014 年、マレーシア航空機墜落事件が起きたとき、プリマコフは、プーチン批判をかなりしている。ロシア外務省のエリートたちには米ネオコン系の「NATOの東方拡大の挑発に乗ってクリミア併合をしたのは間違いだった」という批判があるのは事実だ。

ロシアの東方拡大は、もともとプーチンにはあったが、いまでは東方拡大は、北極海開発にも進み、また、シベリア開発等で中国と蜜月関係・準同盟関係になっている。

中国もロシアもしたたかなプレイヤー。ロシアは、中露のいずれとも仲良くする国——インド、北朝

鮮、ベトナム、ASEAN——をクッションとして、中露が本格的な同盟関係にならないように配慮している。

米国のバイデンは、国務省のブリンケンらとは一線を画しており、米ロの和解はないが米ロの共存をめざしている。

米中露関係については、この 2021 年 6 月以降、ある種のバランスを、バイデンもプーチンも考えている。

アフガニスタンのバイデンの失敗で、中国もロシアも困っている。

「新冷戦」で米英等と中露が対立する、という単純な物語も成立しない。

プーチン外交はしたたかだ。

ノルウェーは、NATO加盟国だが、ここら辺のことがわかっている、ロシアの新聞記者反政府的ジャーナリスト・ムラトフにノーベル平和賞を与えたのではないか。

●**司会 (矢沢)** ロシアは、経済制裁で困っている。またエネルギー輸出依存からの脱却も必要。経済面から見て、ロシアの対外政策は、どうか？

▲**下斗米** ロシアの経済は、世界の比率は小さくなっている。国際収支は黒字で、外貨準備もかなりあり、しかも人民元の比率を高めている。制裁で困っているとは言えない。しかし、世界を牽引するようなイノベーションはない。ロシアの強みは、環境だ。空気と水はロシアのソフトパワー。これは、中国やインドにないものだ。世界の経済のパラメータが変わると、少し余裕が出るかなと思う。[※矢沢：パラメータとは？]

●**司会 (矢沢)** 参加者の佐藤公則さんから「北方領土問題」についての質問があった。安倍政権のときは、進展がなかったが、これからの展望は？

▲**下斗米** 2018 年 11 月シンガポールでの交渉で「1956 年を基礎として」のカードを切ったが、1956 年までの交渉は、戦争末期からの外務次官松本俊一の感覚＝二島論でなされていた。『日本冷戦史』(講談社学術文庫)に書いたが、アジアでは、英米との格差が大。英米の認識の差も大。吉田茂は英国派で、サンフランシスコ条約で独立した背景には、こうしたことがあった。吉田も二島論者だった。

日本ではまだ研究もされていないが、朝鮮戦争で、1950 年北朝鮮が敗北し、国連軍が鴨緑江にまで進軍。マッカーサーが 26 発の核攻撃を準備した段階で、イギリスが止めに入り、アトリー英首相が 1950 年末ワシントンに行った。そこで何があったかわからないが、その後「日本独立」の話が急に出て、マッカーサー解任となった。

その過程でイギリス代表ガスコインと吉田は自由に話せる関係だった。[吉田はマッカーサーとはこうした関係になかった]。そのとき吉田が言ったのは「2 島」論。

そのあと松本俊一がプラス 2 島を出して行き詰まった。この経過を知っているのが河野一郎、鳩

山一郎、岸信介。しかし1956年に下田武三が「4島返還」を固定化し、首相といえども変えられなくなった。米国が二島論では沖縄を返さないといった。

2018年11月シンガポールでの交渉で安倍が「1956年を基礎として」のカードを切ったのは、国際的に何かのサインであった。うまくいかなかった理由は、その直後、プーチン・トランプ会談で、ウクライナ問題が合意成立しなかったこと。

米ロ関係が悪いときに、連合国との平和条約はあり得ない、ということだと思う。ぎゃくに言うと、米ロ関係が変わるとき、つぎのチャンスが来る。

●司会（矢沢） 2021年9月選挙の総括とプーチン政権の今後については？

▲下斗米 憲法改正国民投票について。いまの憲法は1993年のエリツィン憲法で、リベラル立憲主義ではあるが強い権力という性格を持っていた。今回の憲法改正では、それに加えて強い保守主義（ロシア主義）やLGBT問題を付け加えた。

憲法修正なのでじつは国民投票は必要なかったが、敢えて、プーチンは自分への支持投票として、国民投票にかけた。7割の投票率で7割の賛成、つまり49%の支持を目標にしたが、これをはるかに上回る58%の支持を得た。2024年の大統領選挙に出るかどうかが（を判断するため）の投票でもあった。クレムリンの目標は、（投票率）45%×（賛成票率）45%であったが、もう一つのやっかいな問題は、ナバルヌイ要因。彼はもともとヤブリンスキー・グループという都会の中産階級派の系列。ブロガーで「反腐敗」で評判を得たが、支持率は2-4%しかなく、大統領候補として認知されているわけではない。ロシアの「野党」の半分はプーチン翼賛。ナバルヌイが去年8月何者かに毒を盛られ、ドイツが政治犯として受け入れ、米国バイデンの大統領選当選とともにモスクワに戻ってきた事件——この過程が必ずしもすっきりしていない。メルケル政権（の対露政策）をどう見るかも大問題。ドイツとロシアの関係は、ガス・パイプライン「ノルドストリーム2」建設問題も絡んで複雑。と2021年9月の選挙について。ナバルヌイにとって不利なことは、アムネスティ・インタナショナルが、彼の「政治犯」認定を2021年2月取り消したこと（その後元に戻したが）。彼がシベリアで（不明の毒物を）盛られて昏睡したとき、救援チームがドイツへ搬送したのだが、航空便が事件発生直後には発注していた経過にも疑問が出てきた。ロシア国内だけの問題ではなく、東西関係の問題でもある。こうしたこともあって、ノーベル平和賞にナバルヌイが選ばれなかった。

ナバルヌイは、共産党への投票は、呼びかけなかった。

共産党とリベラル派の両方にリスクヘッジするというのが、オリガルフの常套手段。プーチン時代が終わった後、オリガルフがどう動くか、という問題もある。

## ■参加者アンケート回答から

### [2] フォーラムの進め方について

(1) 事前の案内、資料の送付について、何かありましたら書いてください。

●渡辺千尋（滞欧10年、EUの国際関係をウオッチしました。ロシア革命の前後につき、以前より関心を持ってきた者です） 当日、画面が見えませんでした。事前資料も無しでしたが、お話しだけ

でも、聞けて良かったです。

(2) 当日の進め方、時間配分について

●渡辺千尋 良かった

(3) 講師の) プレゼンテーションの仕方について (よかった点、わかりにくかった点、改善を要望する点など)

●渡辺千尋 お言葉が明瞭でした。

[3] 講師の報告について

(1) 共感できる点、できない点、疑問点等、感想を書いてください。

●渡辺千尋 一度同じテーマで先生のご講演を聴いたことがあり、気にかかっていたので参加しました。

(2) 講師に質問したかったこと、質問したがさらに突っ込んで聞きたかったことがあったら、書いてください。

●渡辺千尋 中々学ぶ機会のないテーマですので、今後も機会があれば…と思います。

●高原浩之 (1)(2)をまとめて。①かつてのソ連→現在のロシアに継続するものとして、官僚主義(官僚階級)を考えていましたが、宗教(ロシア正教古儀式派)を教えられた。イスラム主義もあり、社会革命と宗教の問題を考えさせられました。

②ロシアは米中覇権闘争の中でどう動くのか、対外関係をもっと詳しく教えてほしかった。対米だけでなく、対中および対西欧も。

[4] その他 フォーラムの進め方、取り上げてほしいテーマ・講師など

●渡辺千尋 高いレベルでの国際情勢のお話しは、興味深いものがあり、今後もお聞きしたいです。